

## シンポジウム「学校における動物飼育活動と『主体的・対話的で深い学び』」

渋谷 一典 先生（文部科学省初等中等教育局教科調査官）



実現しようとするという生活科固有の「身近な生活に関わる見方・考え方」を生かすことが大切である。こうした生活科の固有な学びの中では、自分と地域の人々、社会及び自然との関わりが具体的に把握できるような学習活動の充実が一層求められる。そのためには、対象に直接関わる活動や体験を充実させていくことが欠かせない。

### 1 新学習指導要領に基本方針から

変化が激しく予測困難なこれからの社会を生きていく子供たちには、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようになることが求められている。今回の学習指導要領の改訂においては、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することとされた。

生活科の指導に当たっては、目標にしている「知識及び技能の基礎」が習得されること、「思考力、判断力、表現力等の基礎」を育成すること、「学びに向かう力、人間性等」を涵養することの三つが偏りなく実現されるよう、年間や単元など内容や時間のまとまりを見通しながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが重要である。主体的・対話的で深い学びとは、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくり出すために、児童が考える場面と教師が教える場面とをどのように組み立てるか、といった視点で授業改善を進めることで実現することができる。その際、これまでと同様に具体的な活動や体験を重視する中で、身近な対象を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを

### 2 生活科における飼育活動

生活科においては、今回の改訂において「動植物の飼育・栽培」に関する学習内容が次のとおり示された。

(7) 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

動物を飼ったり植物を育てたりする活動とは、継続的な飼育・栽培の中で、成長の様子を見守ったり、動植物と触れ合い、関わり合ったりすることである。長期にわたる飼育・栽培の過程では、自ら関わっていくことで、児童の感性が揺さぶられるような場面が数多く生まれてくる。よって、一時的・単発的な動植物との関わりにとどまるのではなく、例えば、季節を越えた飼育活動で成長を見守ることなどの指導の工夫が大切であり、そのような活動を通してこそ、生命を尊重する心や態度が育まれると考えられる。具体的には、成長や変化、生命の尊さや育て方など様々なことに気付き、親身になって世話ができる姿となって現れる。

今回の改訂においても、継続的な飼育・栽培を行うことが強調されているが、これは、自然事象に接する機会が乏しくなっていることや生命の尊さを実感する体験が少なくなっているという児童の置かれた現状を踏まえたものであり、今回の改訂においても、引き続き充実を図ることが必要である。